



## 台湾からマイスター取得のために介護に携わる9名の方が研修に来ました！

10月7日、光洋-デスパース本社に台湾の「悠然山荘」・「悠然緑園」・「重建樂園」という3つの介護施設から高齢者介護に携わる9名の介護士さんが来られました。目的は光洋マイスターの認定(光洋が定めた排泄ケアを中心とした介護の基本知識と技術の習得による認定資格)を取得するためです。皆さんは施設で光洋の製品を使用してくれていて、光洋マイスターに非常に興味を持ってくださいました。

今回は7泊8日の日程の中で、マイスター取得のためのカリキュラムをぎゅうぎゅうに詰め込んだスケジュールを全てこなし、認定試験を受けていただきました。講義はおろか会話も全て通訳兼マイスター候補生のペトラさんとエミーさんを通じて行い、テキストも事前にペトラさんに中国語に訳していただきました。

施設サービスが一般的な日本の介護状況を踏まえて作成している光洋マイスター認定講座の内容に、皆さんは当初理解ができず質問が多く挙がりました。なぜなら台湾の介護事情は日本と大きく異なっているからだそうです。

台湾の高齢化率は現在約13%。しかし高齢化のスピードは早く、深刻な人手不足を他国(インドネシアやフィリピン等)から介護人材を積極的に受け入れることで補っているとの事。しかも高齢者が施設への入所を拒む傾向にあるため在宅介護が中心となっており、外国人労働者による家庭滞在型介護を受けることが一般的なのだそうです。

皆さんは「台湾では来年から日本やドイツの介護保険をモデルとした長期サービス法が施行されるため、日本の介護状況もよく知っておきたい」という強い思いがあり、それに答えるために我々も改めて日本の介護保険制度や介護事情について勉強し、講義にあたりました。そしてこの研修で台湾の介護事情についても多くを学ぶ機会となりました。

研修は同時通訳で進めるため通常の2倍以上の時間がかかり、また覚える内容も非常に多くあったにも関わらず、細かいことまで真剣にメモを取り、質問もたくさん挙がり、活気に溢れたものでした。

そして研修の中では、それぞれの国の介護の現状についていろいろと意見を交換をする場面もあり、お互いにとって刺激となりました。

たとえば多くの台湾の人々は長期介護サービス法の導入に後ろ向きであること、台湾では共働きの家庭が非常に多いため外国人労働者による在宅滞在介護は欠かせない存在であること、感染症は問題視されている

が介護現場では予防の徹底にはまだまだ至っていないこと、台湾では自宅での看取りの割合が4割以上(日本は1割強)と高く、住み慣れた場所で老後から看取りまでを包括的に支える日本の地域包括ケアの在り方に非常に興味があり、見習いたいと考えていることなどは非常に興味深い内容でした。

そして実地研修では日本の介護施設の見学も行いました。2つのグループに別れ、期間中全部で8施設に訪問させていただき、日本の施設の作りや、各居室の様子、センサー等の設備等の見学や、職員さんたちの業務内容の説明を受けました。

そのなかで意外にも台湾では湯船につかる習慣がないため、「お風呂の設備がとても日本らしい」と興味を持たれていたのが印象的でした。

また施設での排便コントロールの取り組みについて意見交換会を行ったり、コンシェルジュが行うおむつ交換の現場立会い指導や、職員様へのあて方勉強会の見学も行うなど、内容盛りだくさんの施設見学会となりました。

最終日前日の夜遅くまで一生懸命あて方の練習をしたりテストの自習をされた甲斐もあり、座学と実地の2つの試験において全員優秀な成績を収め、晴れてマイスター認定となりました。

しかし合格を喜んでいるのも束の間、この日は夜から台風19号の影響で電車も計画運休を発表している日。皆さん認定式の後大慌てで成田に向け出発しました。予定では次の日の朝のフライトとのこと、飛行機が無事運航するのかと心配していましたが、翌日「予定通り台湾に帰国しました。」とのメールが届き、一安心しました。

早速、台湾の自分達の施設の職員に製品の使い方やあて方のレクチャーを行っているとの報告をもらっています。皆さんが、今後光洋マイスターとして台湾で活躍していただけることを願っております。

我々にとっても実りの多い研修となりました。皆さん7泊8日の長い研修、本当にお疲れ様でした。

### 光洋マイスター認定研修カリキュラム

#### 座学研修

排泄のメカニズム

排泄のアセスメント

失禁におけるスキンケア

褥瘡と褥瘡予防

感染症対策

#### 実地研修

おむつあて方グループワーク

陰部洗浄とスキンケア

施設見学



光洋マイスター：強強クラブの皆さん

# 生きていると実感できる “アクティビティケア”とは？

社会福祉法人 恵寿会  
老人総合福祉施設 グリーンヒルみふね 様

九州山地に囲まれた豊かな緑と美しい水の宝庫、熊本県上益城郡御船町。そんな環境下にある老人総合福祉施設グリーンヒルみふね様は、「安全という名のもとに施設に閉じこもり」になりがちな近年の介護施設のレクリエーション活動のあり方から脱却するため、自然をフル活用しながら生きている喜びを感じていただく※1アクティビティケアを導入しています。今回は吉本施設長・中村施設部長・※2アクティビティディレクターの倉本様にお話をお聞きしました。

※1アクティビティケア：高齢者アクティブティ開発センターが推進する高齢者ケア

※2アクティビティディレクター：高齢者アクティブティ開発センターの定める認定資格

—アクティビティケアの取り組みを教えてください。

**中村施設部長**：施設の周囲には自然がたくさんあります。その自然の中でする遊びは季節折々の景色を楽しめたり鳥のさえずりや風などの音を聞きながら出来るのでとても気持ちが良いのです。今までの老人ホームでは利用者は風邪をひかないようにとか、転倒をしないようにとか考えられてしまって籠の中の鳥状態でした。確かに危険性も考えられますが、芝生を一面に植えて地面をやわらかくしたり、安全にはいろいろと配慮した上で様々な活動を外で行っています。

—それでは具体的に「アクティビティケア」とはどういったものなのでしょう。

**吉本施設長**：言葉では難しく感じるかもしれませんが、簡単に言うと“日常生活を大事にしていこう”ということです。例えば、今日はもう少し寝ていたいとか、好きな時間に食事をしたいとか、そんな一人ひとりの生活文化を大切に、その人らしさを引き出して差しあげるというのがアクティビティケアなんです。レクリエーションと混在しがちですがレクリエーションは何か物を介して利用者と職員が繋がるもので、一瞬一瞬をご本人が自然と楽しめてい

ることがアクティビティケアなんです。実はこの取材も利用者にとってアクティビティケアの1つになっているんです。

—確かに、利用者が取材といういつもと違う雰囲気にとわわして活気付いているのが分かります。

—それではアクティビティケアを取り入れようと思ったきっかけは？

**吉本施設長**：アクティビティケアを導入する前はネイチャーゲームという五感を使って遊ぶゲームを行っていました。しかし要介護5の寝たきりの方たちは居室内にすることが多く室温を常に快適な状態に保っている為、なかなか五感を使って季節を感じることはできません。そして「安全という名の施設閉じこもり」に私たちがしてしまっているのではないかと気付いたんです。利用者に安全な状態は職員には楽でも利用者の生活の豊かさがなくなってしまうんじゃないかと。私は施設内でペットボトルのボウリングをやっても楽しいけど、それだったら本物のボウリングをやったほうがいいんじゃないかとか、歌を歌うならカラオケボックスに2～3名で行ってもいいんじゃないかと思うんです。利用者がやりたいと思うことを施設内で近い形で実現するのではなく、実際に実現していこうということです。こういったことはアクティビティディレクターの倉本を中心に松本と藤原含め3人が指導者となり実施しています。—倉本様はアクティビティディレクターの資格を取得する際の苦労話があるとお聞きしましたが？

**倉本様**：苦労話というよりは、自分の中にあつた壁が崩れた感じです。こんなシンプルでいいのよ。これで喜んでくれるのか、と気づくことができたのです。駄目なものがないのがアクティビティケアです。もちろん危険のない程度ですが。ある時、施設の皆で切干大根をピーラーではなく包丁を使って作っていた際、利用者さんに「気をつけて包丁を使ってください」とお伝えしたところ、逆に私が利用者から指導を受けてしまいました。



上段：左から中村施設部長・吉本施設長・倉本様  
下段：松本様・藤原様

—とても素敵なエピソードですね。最近施設様では、栗饅頭を作るためになんと利用者と栗拾いから始めて作ったそうですね。しかもその日に参加してない利用者のご自宅までお届けしたとか。今後の目標があれば教えてください。

**倉本様**：今後の目標は干柿を成功させることです。毎年作っていますが、カビが生えてしまっ

**吉本施設長**：それこそ利用者にも教えてもらったら？

**中村施設部長**：柿の木はその斜面にいっぱいあるからそこで収穫するといいわよ。

—利用者だけでなく、職員のみなさんで楽し

まれていることがとても伝わってきました。吉本施設長・中村施設部長・倉本様お忙しい本



切り干し大根作り



ハロウィンパーティーは爽やかな野外で



施設のお庭で栗拾い、この後栗饅頭作りしました